

看護学生のインシデント・アクシデントを予防するための対策

本村 香、林 資子、徳珍温子
大阪信愛学院短期大学

【緒言】 医療安全教育において看護学生のリスクセンスを高めることは、危険を予防するという「医療安全」の視点を教育することであり、より安全な行動ができるという「セーフティプロモーション」を促進することである。実習前の学生のインシデント・アクシデントを予防するための対策についての認識を明らかにし、リスクセンスを高め学生が自身で安全な行動ができるための教育について検討することを目的とした。

【方法】 A看護基礎教育3年課程の3年次生90名を対象に、2018年4月の実習オリエンテーション時「インシデント・アクシデント予防」のグループワークを行い、「予測されるインシデント・アクシデントを予防するための対策」をA5用紙1枚程度に記述しデータとした。得られたデータで意味が同じと思われるものは語を統一した後に、フリーソフトKH-coderを用い頻回に出現した語を頻出語としてリスト化し分析を行った。本研究は大阪信愛学院短期大学倫理審査委員会で承認を得た。本研究発表に関連して、開示すべき利益相反関係にある企業等はない。

【結果】 総抽出語は1550語で、使用数は801語であった。出現回数4回以上の語で階層的クラスター分類を行ったところ、6つのクラスターに分類された。分類された語を共同研究者で検討し、クラスター別に名前を付けた。

【考察】 クラスター1《行動の報告・連絡・相談》から、患者に（援助）前に状態を（把握）すること、指導者ないし教員へ（報告）（連絡）（相談）することがインシデント予防対策につながると認識していることがわかる。しかし、予測するインシデント・アクシデントにあった（確認）の語は、予防対策では（報告）（連絡）（相談）の語と同じクラスターには含まれず、クラスター6《事前の知識・技術の確認》に含まれていた。また、他のクラスター内で（チェック）（見る）という語が出現しているが、（確認）という語でないのは自分たちが直接的介入を行わない援助という意識があるのではないかと考える。このことから学生は、（技術）の（前）や自己の（知識）や（技術）などに関する（事前）の（確認）など事前学習は予防対策につながると認識しているが、患者援助の前後や直接的介入を行わない援助に関しての（確認）の意識は低いと考える。

【結語】 予測するインシデント・アクシデントには、（報告）（連絡）（相談）の語に加えて、（確認）の語があったが、予防対策では（報告）（連絡）（相談）の語と同じクラスター1には含まれておらず、予測したことを実践に結びつけるための教育的介入を検討する必要があると考える。